



日本文明論—文明ネットワーク
の観点から



小林 道憲

日本文明論—文明ネットワークの観点から

小林道憲

文明ネットワーク

人類が今までつくってきた諸文明は空間的にも時間的にもつながり、ネットワークを形成してきた。文明ネットワークには、陸と海のネットワークが考えられるが、それらも、それぞれ結び合わされ、文明の発展に寄与してきた。ユーラシアの陸と海のネットワークの中で代表的なものとしては、草原の道ネットワーク、オアシス路ネットワーク、さらに東アジア海域、インド洋、地中海ネットワークなどをあげることができる。後三者を総称して南海路ネットワークと言うことができよう。

ユーラシアの陸と海のネットワークも、時代を追うごとに連結され、日本、朝鮮、中国、東南アジア、インド、西アジア、ヨーロッパも連結されていった。特に、紀元後、イスラ

ムやモンゴルや西欧諸勢力によって築かれてきたグローバル・ネットワークは、それ以前から形成されてきた各地のネットワークを総合し、文明のグローバル化を達成してきた。それらは、文明と文明を結びつけ、諸文明の交流と伝播を促進し、文明の変動を可能にしてきたのである。そして、それらのネットワークの結節点には、中継基地としてのオアシス都市や港市が発達し、オアシス都市国家や港市国家が形成された。そこで活躍した草原の道の騎馬遊牧民、オアシス路の商業民、南海路の海洋民の果たした役割は大きい。

日本文明は古来海からもたらされた文物や情報の流入によって常に大きく変貌してきたが、そのことによって、日本文明はユーラシアの諸文明の影響を深く受け、その文明要素の重層と複合によって文明を形成してきた。日本文明は、交通路としての海を通して、草原の道ともオアシス路とも南海路とも結びつき、中国や朝鮮ばかりでなく、インド、ペルシア、オリエント、地中海、ヨーロッパ、各地の文明と深く結びついてきた。日本文明も、これらのネットワークとつながることによって、ユーラシアの諸文明と連動してきたのである。

る。

このように考えていくなら、日本文明を形成した海のネットワークとして、太平洋ネットワークも考えねばならないであろう。太平洋の北赤道海流や黒潮に乗って、新大陸の文明の遺産が日本文明に流入し、さらに、北太平洋海流に乗って、日本文明から新大陸の文明へ、日本列島の文物が流入していないとは言えない。近世や近代になればこの交流は激しくなり、太平洋ネットワークは、文明の近世や現代を開く上で大きい役割を果たした。

草原の道ネットワークと日本文明

草原の道のネットワークを通して、遊牧民が、ユーラシア大陸の西から東へ、東から西へ運んだものは、青銅器や鉄器、馬や絹など多種多様である。文明は新文物の流入によって変動していくが、これらのものが、ユーラシア大陸の東西の文明変動を起こしていったことは確かである。

青銅器の制作技術が発見されたのは、西南アジアでは、紀元前五千年紀の後半のことであったといわれる。黒海の沿岸

に住んでいたアーリア系の遊牧民は、この青銅器文化を受け入れ、カスピ海北部から南シベリア、中央アジアに至る草原地帯に拡めた。特に紀元前 1000 年頃から活躍した騎馬遊牧民のスキタイは、南ロシアの草原地帯にあって、早くから動物意匠を特徴とする独特の青銅器文化をつくりだした。中国のオルドス青銅器文化は、このスキタイ系青銅器文化の最も東方のもので、匈奴によって担われたものである。このオルドス青銅器文化は、中国大陸の戦国時代から漢代の文化の影響を受けて、胡漢様式の青銅器文化を生み出した。中国大陸北部に起きた遼寧式青銅器文化も、胡漢様式の青銅器文化であった。これらが、朝鮮半島に流入し、日本文明の弥生文化形成に大きな影響を与えたのである。

鉄鉱石からの精錬技術と鍛鉄技術が完成されたのは、紀元前 1930 年～1750 年頃のアナトリアのアッシリア商人居留地時代と言われ、これをヒッタイト古王国やヒッタイト帝国が発展させたと考えられている。このヒッタイト帝国が、紀元前 1200 年頃滅亡、それとともに、製鉄技術がユーラシア大陸の各地に伝わり、ユーラシア諸文明を大きく変化させて

いった。

例えば、ユーラシア東部の中国大陸に製鉄技術が普及するのは、紀元前 6 世紀の春秋時代のことであった。そして、鉄器の普及とともに、農業や手工業が発達し、戦争の規模も拡大し、戦国時代の到来をみている。この中国の製鉄技術は、戦国時代後期には、華北に広まり、これが朝鮮半島に伝えられ、さらに、日本列島にも波及し、日本文明の大きな変動をもたらした。鉄器の普及は、日本各地に小地域国家を成立させ、都市文明の原型をつくっていったのである。

特に、弥生から古墳期の日本文明は、草原の道と深くつながり、騎馬遊牧文化の影響を多分に受けてきた。新技術の伝播は、大きな文明変動をもたらす。スキタイや匈奴がもたらした青銅器文化や鉄器文化は、海を隔てた日本文明にも巨大な影響を与えたのである。この青銅器や鉄器を中心とするスキタイ系文化の源泉が、最終的には西南アジアにあるとすれば、古代の日本文明も、遠くユーラシア大陸の西部に源泉をもつことになる。その間を取り持ったのが、スキタイや匈奴の騎馬遊牧民族だったのだから、遊牧民の文明は偉大な媒体

文明だったのだと言わねばならない。

さらに、また、ユーラシアの草原の騎馬遊牧民族は、草原の道のネットワークを通して、騎馬技術を各方面に伝え、人類の文明史を大きく塗り変えていった。中国の戦国時代から漢時代にかけての騎馬技術も、朝鮮や日本の騎馬の風習も、北方草原の騎馬遊牧民に起源をもっている。草原の騎馬遊牧民が発明した騎馬技術は、運送の大量・高速化、行動範囲の拡大、戦術の機動化、交易と戦争の増大、社会の組織化など、ユーラシアの文明変動に大きな役割を果たし、人類史において偉大な影響を与えた。

現に、4世紀から6世紀にかけての日本の古墳文化にも、草原の道の騎馬遊牧文化の影響が見られる。騎馬技術の到来は、日本文明にも、交易圏の拡大や交通通信網の発達、戦闘形式の変化など、技術革新をもたらし、新文明の創造に寄与した。日本文明は、常に外から新しい文物が入り込むことによって変動してきた。その変動に、ユーラシア大陸を東西に結ぶ広大な草原の道に生まれた騎馬遊牧文化の果たした役割は大きい。

オアシス路ネットワークと日本文明

日本文明は、古来、ユーラシア大陸から押し寄せてくる諸文明の影響を深く受けてきた。オアシス路に源流をもつ諸文明の影響も、今日の日本文明に色濃く残っている。

4世紀から9世紀にかけて、ユーラシア大陸西部には、東ローマのビザンツ帝国、ササン朝ペルシアやアラブ・イスラム帝国、ユーラシア大陸東部には、魏晋南北朝から、隋唐に至る帝国が出現し、これら東西文明が、オアシス路を通して交流した。この時代の中国文明にオアシス路を通して流入してきた外来文化は、北西インド・中央アジア由来の大乗仏教文化、ササン朝ペルシアやアラブ・イスラムの西アジア文化、東ローマのビザンツ文化など、多様であった。この中国文明の影響を、飛鳥・白鳳・天平時代の日本文明は、直接、または朝鮮半島を経由して受けた。6世紀から8世紀にかけての日本文明の形成に、オアシス路の果たした役割は大きい。

オアシス路を経て日本に流入してきた文明の最大のものは、仏教であった。インドに発した仏教は、北西インドや中

中央アジアでペルシア文化やギリシア文化を取り込みながら、大乘仏教を生み出し、オアシス路や中国、朝鮮を通して、日本にもたらされた。目に見える文明の成立や発展に、目に見えない宗教思想の果たす役割は大きい。日本文明の形成においても、大乘仏教の果たした役割の大きさは何ものにも代えがたい。仏教の伝来によって、日本文明は大きく飛躍し、文明化を果たしていくことができたのである。

日本への仏教伝来は、6世紀前半、朝鮮半島を通してであったが、非公式には、それ以前から、仏教は、半島からの渡来人によってもたらされていたであろう。こうして、6世紀末から8世紀初めにかけての日本では、仏教を基礎に置く国家のグランド・デザインが整備され、飛鳥・奈良には多くの寺院が建立され、日本に広く仏教が普及し、日本文明の新しい形成が可能になったのである。

日本文明には、中国、インド、ペルシア、オリエント、地中海など、世界各地の文化が流入してきている。日本文明の中に世界文明がある。しかも、そのかなりの部分がオアシス路起源である。いかなる文明も、外から様々な文物を受容し

て、それを組み合わせながら、新しいものを創造し、文明発展の跳躍台にしていく。日本文明も、ユーラシアの諸文明の影響を深く受け、その遺産を保存しながら、自家薬籠中のものにし、独自の文明を形成してきたのである。文明形成にとって、交通路が重要になる理由も、そこにある。文明の縦の変化を理解するには、文明間の横の関係をみななければならないのである。

南海路ネットワークと日本文明

日本列島の縄文時代から弥生時代にかけて、その文化の基底部に、北方系ばかりでなく、南方系の文化が濃厚に流入し、日本列島が長江中下流域や華南の文化と共通性をもっていることは、すでによく知られている。しかも、この湿潤中国の文化は船や水と深い関係にあり、そのような海人文化が、縄文以来、間断なく、日本列島に流入していたのである。陸稲や水稲の稲作文化も、その一つである。日本列島と中国大陸との東シナ海を挟んでの交流が、古代以来盛んに行なわれ、それが日本文明の新しい形成に寄与したことは周知の事実

である。

前漢から後漢にかけても、弥生時代の倭人が漢に朝貢したという記事がいくつかある。この頃、北部九州には、奴国をはじめ、多くの港市国家が興き、朝鮮半島の楽浪郡などと盛んに交易を行ない、中国の新文明を積極的に取り入れていた。邪馬台国の卑弥呼が北魏に朝貢し、親魏倭王の称号を授けられたのも、倭と華北の東シナ海を介した盛んな交流を物語るものである。

古墳時代に入っても、倭の五王は中国南朝に朝貢している。5世紀にも、呉の国から、新技術をもった渡来人が来朝し、倭国からも遣いしたという記事が多く見られるが、ここで言う呉国は、広く華南地方の南朝を指すものと思われる。4世紀から5世紀にかけては、製鉄、土木、土器製作、織物、造船などに関する新しい技術が大陸から流入し、それが、古代日本の文明創造に大きく寄与した。その際、東シナ海を介した日本と大陸の交流の果たした役割は大きかったと言わねばならない。

6世紀に入ると、日本列島には、主に百済から仏教が伝来

し、仏教文化の隆盛が見られる。だが、この百済仏教が中国南朝の仏教の影響を深く受けていたことを考えれば、日本の初期仏教と中国南朝の仏教の密接な関係も無視できない。日本の古代文明は、朝鮮半島や中国大陸から、東シナ海を経て流入してきた文物によって、形成されてきたのである。

7世紀から9世紀にかけても、東シナ海を介した日中交流は盛んに行なわれた。なかでも、遣隋使や遣唐使の派遣は、日本文明の形成に大きな役割を果たした。遣隋使や遣唐使には、留学生や学問僧が参加、隋や唐の新しい文化の摂取に努め、帰国後、これを普及した。彼らが隋や唐の国際色豊かな文化から学んだものは、政治制度、学問、思想、宗教、芸術、あらゆる面に及んだ。特に、奈良、平安時代の文化は、遣唐使がもたらした唐文化によって彩られた。

遣隋使や遣唐使が日本にもたらしたもので最大のものは、大乘仏教の諸宗派の教えであろう。804年の遣唐使で入唐した最澄や空海が天台宗や真言宗をもたらしたことは、あまりにも有名である。空海の完成した密教は、中国唐時代の密教に源泉をもち、それは、インド僧、金剛智や不空によっても

たらされたものであった。南インドで起きた密教は、ベンガル湾を渡り、ジャワのボロブドゥール遺跡として足跡を残し、南シナ海を渡って長安にもたらされ、さらに東シナ海を渡って、朝鮮、日本にもたらされ、完成したことになる。考えてみれば、文明のネットワークそのものが、密教の曼荼羅構造をなしているのである。

遣隋使や遣唐使が通った海上のルートは様々であるが、多くの場合、直接長江以南に至る南路が取られた。移動民が文明形成に果たす役割は大きい。遣隋使や遣唐使の留学生や留学僧、外交使節や商人や帰化人などは、東シナ海を経由して、隋唐の新しい文物をもたらし、そのことによって、日本文明を新しく形成していったのである。

10世紀後半以後も、東シナ海を介した日中交流は、日増しに発展していった。特に、宋王朝が成立すると、宋王朝の商品経済が、東シナ海の海上貿易を通して、朝鮮や日本に波及、東シナ海交易圏は繁栄の時代を迎えた。宋代の陶磁器が、朝鮮、日本、琉球、台湾などにも普及したのは、その繁栄を物語っている。12世紀末の平安末期に、平清盛が積極的に

日宋貿易を推進したことは、よく知られている。この日宋交流、特に南宋との交流は、その後の鎌倉時代になっても引き継がれた。

そればかりか、東アジア海域交易圏は、南シナ海を通して、インド洋交易圏とも深くつながっていた。その頃、日本が、イスラム諸国にも、黄金や黒檀を産する国として知られていたのはそのためである。9世紀から10世紀にかけて、西アジアの陶器が東アジア海域諸国に逆輸出され、その一部が日本に出土しているのも、東アジア海域交易圏とインド洋交易圏の深いつながりを暗示している。

この東アジア海域貿易の隆盛は、日本にも、商業の発達や都市の勃興をもたらすことになる。日本の武士団の成長と封建制の成立も、東シナ海を通じた宋や南宋との交易による繁栄を抜きにしては考えられない。日本の武家政権と封建制を確立した鎌倉幕府も、東アジア海域交易圏と深く結びつき、その経済的基礎のもと、荘園貴族の支配を覆していったのである。特に、鎌倉時代後半以後には、市が形成され、港湾都市をはじめ、多くの都市が勃興してくる。繁栄する東アジア

海域交易圏の中で、貿易に携わった商人や武士たちが、大陸から新しい文物をもたらし、日本文明を大きく転換させる働きをしたことに注目しなければならない。

12世紀の西欧でも、アラビア文化の積極的移入、商業の発達、都市の勃興、封建制の確立などが見られ、そのことによって西欧文明は自立していった。ちょうど、それと同じように、中世の日本でも、大陸文化の積極的移入、商業の発達、都市の勃興、封建制の成立が見られ、日本文明の自立が可能になった。しかし、この西欧文明と日本文明の平行現象は、ユーラシア大陸の文明変動と無関係に起きたわけではない。西欧文明と日本文明の平行現象の背後に、それを可能にした東シナ海—南シナ海—インド洋—地中海を結ぶ海上交易活動を考慮に入れなければならない。しかも、それらの海をつないだイスラム文明の働きを無視することはできない。西欧文明と日本文明は、ユーラシア大陸から切り離された環境のもとで平行進化してきたのではないのである。むしろ、両文明は、イスラム文明を媒体として、密接に連動していたのである。

13世紀に入ると、モンゴル帝国が、草原の道とオアシス路を統一し、中国大陸に進出、元朝を建てた。さらに、モンゴルは、東シナ海や南シナ海の海上の道へも進出、ユーラシア大陸を循環する大商業網を形成した。そのため、交易が活発化、商業はますます発達し、東アジア海域世界に、多くの港市が発達した。元は、東南アジアへも積極的に進出、東南アジア諸国からも遣使があり、盛んな交易のもと、南シナ海交易圏は一段と繁栄した。東シナ海交易圏でも、天龍寺船の派遣など、盛んに日元貿易が行なわれ、商業活動は活発に行なわれた。また、この時代も、日本や中国の禅僧たちが日元間を往来、彼らが、茶の湯や能など、日本の中世文化に与えた影響は大きい。

中国大陸に元朝を倒して明朝が建ったのは、14世紀後半のことであった。明朝樹立とともに、明の洪武帝は、海外諸国に入貢を促す使節を派遣、これに応じて朝貢使を送ったのは、日本、朝鮮、琉球、東南アジア諸国、南インドなど、十数国であった。また、永楽帝は、15世紀初頭、南海路に鄭和を派遣、東南アジア諸国をはじめ、南アジア、西アジア、

東アフリカとの朝貢貿易を促進した。

さらに、14世紀末から15世紀にかけては、ジャワやスマトラのパレンバンの船が、琉球や朝鮮、日本沿岸に貿易を求めて来航した。この時代には、東シナ海と南シナ海も、一つの交易圏として、すでに緊密なネットワークを形成していたのである。国境や民族の枠を超えて動く境界民が、文明変動の媒体として果たす役割は大きい。

日本と明との東シナ海を介しての交流も盛んに行なわれ、それが、室町時代の文化形成に大きな影響を与えたことも否定できない。足利義満は、1401年に遣明船を派遣、明との間に朝貢・冊封関係を結び、勘合符貿易によって、中国商品の入手に努めた。

これらの中国商品は、日明間の官貿易だけでなく、私貿易によってももたらされたから、それらは、商業のより一層の発達をもたらし、多くの商業都市を発達させた。商業や金融を中心とした資本主義の発達は、江戸時代に見られるだけでなく、さかのぼって、14世紀後半以来の室町時代に源泉をもっている。しかも、それが、東シナ海を介した中国大陸と

の交易によってもたらされたことには、注目しておかねばならない。日本中世の商業や都市の発達は、決して自成的に起きてきたものではないのである。

堺や博多などの港市の発達は、西欧にとってのヴェネチアやジェノヴァの発達に当たり、しかも、両者の繁栄は偶然の一致ではない。両者は、東アジア海域、インド洋、地中海をつないで互いに連動していた。日本の室町時代は、西欧のルネサンス期と同様、初期資本主義の発達のもと文芸復興の見られた時代であったが、これも、単なる平行進化ではなく、相互進化の結果であったとみななければならない。

特に、この時代の日本文化に、禅宗が与えた影響は大きい。茶道、華道、能楽、水墨画、枯山水の庭園、書院造など、室町時代に成立した日本独自の文化には、禅の思想が濃厚に見られる。そして、それは、鎌倉から室町にかけて、宋や元や明から移入されたものだったのである。日本文明は、多くの場合、海から流入してきた文物によって形成されてきた。文明の自己形成は、主として、他の文明との交流を通して起きてくる。

西欧文明との出会い

16世紀以降の東アジア海域は、ポルトガルやスペイン、オランダやイギリスの西欧諸国の登場によって特徴づけられる。西欧諸国は、中世以来、常に競合し合っていたから、そのダイナミズムを、大西洋や太平洋、インド洋や東アジア海域にまで拡大してきたのである。しかし、この西欧諸国の世界進出も、もとをただせば、アジア諸国が引き起こしたとも言える。中世以来の西欧の商業の発達も、アジアの商業革命の衝撃によってもたらされたものであった。また、西欧人が東洋への憧れをもったのも、モンゴルがつくった陸と海に渡るユーラシアの大循環路の刺激があつてのことであつた。商業活動は、当時、東アジア海域やインド洋を介して、アジア諸国間においてすでに発達していた。東アジア海域でも、東南アジア、中国、朝鮮、日本、台湾、琉球、対馬などを相互に結ぶ強力な商業網が形成されていた。西欧諸国は、新規参入者として、まず、この東アジア海域の域内交易に参加したのである。

アジアは、決して停滞していたわけではない。中国を中心とする東アジアは、18世紀末までは、まだ西欧に対する優位を保っていた。西欧諸国が東アジアを本格的に席捲するのは、18世紀末、産業革命に成功してからのことであった。以来、大西洋や太平洋、インド洋や東アジア海域を緊密に結ぶ西欧諸国によるグローバル・ネットワークが完成した。西欧諸国は、この海のネットワークを確立することによって、アジア諸国に対して優位に立ったのである。

確かに、この西欧諸国による海洋中心のグローバル・ネットワークの形成は、ポルトガルやスペインが大西洋やインド洋、太平洋や東アジア海域へ進出したことに源泉をもっている。しかし、17世紀に入ると、ポルトガルやスペインに代わって、オランダやイギリスが相次いで東アジア海域に進出。特に、オランダは、ジャワのバタヴィアに根拠を置き、貿易の覇権をめぐるイギリスと争いながら、中国、朝鮮、日本間の生糸、絹、陶磁器などの貿易で大きな利益を上げた。他方、インド貿易に活動の舞台を求め、その経営に集中していたイギリスも、少し遅れて、17世紀中頃以後、東アジア海

域貿易に参入、18世紀後半からは、東アジア海域とインド洋海域の中継貿易の主導権を握った。そして、これが、イギリス産業革命の導火線になっていったのである。

日本文明に近世という時代をもたらしたのは、16世紀中頃の西欧世界との出会いであった。16世紀初頭、南シナ海に進出してきたポルトガル商人は、やがて、東シナ海交易にも参入、特に、明、東南アジア、日本間の中継貿易で利益を上げ、日本に南蛮文化をもたらした。また、戦国時代を收拾した秀吉や家康も、東シナ海や南シナ海を通した海外との通商には積極的で、ポルトガルやスペイン、オランダやイギリスとの貿易促進を図った。そればかりか、日本人も、秀吉や家康から与えられた朱印船令のもと、積極的に東シナ海や南シナ海に進出、東南アジアとの貿易を行ない、各地に居留地をつくった。日本人は、東南アジア各地で、西欧諸国の商人とも接触、多くの物産を手に入れ、その代価を、日本産の大量の銀や銅で賄った。これら、西欧諸国との交易活動を通して、日本に西欧近世の文化がもたらされたのである。

日本にもたらされた西欧近世文化の第一に挙げねばなら

ないものは、宣教師によって広められたキリスト教である。しかし、宣教師たちが広めたのは、キリスト教ばかりではない。布教の手段として伝達された西欧近世の科学知識や技術が、その後の日本文明に与えた影響は、今日のわれわれが想像する以上のものであった。日本人は、この西欧由来の新知識や新技術の方にも異常な興味を示した。それは、幾何学、天文学、地理学、医学、冶金術、造船術、航海術など、あらゆる方面に及んだ。

宣教師や遣欧少年使節によって世界地図がもたらされたことも、日本人の世界観の変革に大きく寄与した。それまで、日本、中国、インドしか知らなかった日本人は、それらがユーラシア大陸の一部にすぎないことを知って、旧来の世界観が一瞬にして崩壊するのを経験した。世界地図の到来は、地球球体説とともに、大きな衝撃だったのである。この時代に、日本は、経済的にも、政治的にも、中国を中心とする華夷秩序から離脱したが、この華夷秩序からの離脱にも、西欧から受けた世界観の大きな変革が影響していた。

1543年、中国のジャンク船に乗ったポルトガル人が種子

島に漂着した時伝えた鉄砲が、その後すぐに国産化されたことは、よく知られている。鉄砲とその製作法は、日本に各地に瞬く間に伝えられ、戦国時代の日本に急速に広がっていった。この鉄砲の伝来とともに、築城法も大きく変わり、城郭、濠、石垣、楼閣が造られ、戦術も大きく変化していった。これは、一つの文物が流入してくることによって、文明全体が大きく編成し直される恰好の例である。海を越えて西欧からもたらされた新文明の衝撃波は、日本文明に巨大な影響を与えたのである。

文明は出会いによって変動していく。戦国時代から安土桃山時代にかけての南蛮時代は、日本文明にとって、最初の西欧文明との出会いの時代であった。この時代は、西欧近世文化が日本に初めて流入し、革命的な世界観の転換が引き起こされた時代であった。外来文化の流入によって、文明は激しく変動していくが、16世紀末から17世紀初めにかけての西欧近世文化は、それまでとは違って、全く新しいユーラシア大陸の西端に生じた西欧文明のもたらしたものであった。この点では、これは、幕末維新の怒濤のような英米文化の流入

に匹敵すると言えよう。とすれば、日本文明の西欧化は、幕末維新からではなく、この南蛮時代から始まったのだと言わねばならない。16世紀中葉を境に、日本文明は西欧文明の影響下に入ったのである。しかも、これが、大西洋や太平洋、インド洋や東アジア海域を通ってもたらされたことには、着目しておかねばならない。

1639年の鎖国の後も、長崎の出島のオランダ商館を通して、西欧近世の学術は、主にオランダ通詞たちを介して流入していた。1720年、吉宗によって、キリシタンに関係のない西欧文献の輸入が許可されると、あらゆる領域で、当時の西欧の科学が蘭書を通して学ばれるようになる。蘭学の勃興である。日本における蘭学の学習熱は、幕府の官僚、大名、下級武士、浪人、町人にまで及び、日本人の世界観の変革に大きく影響した。この蘭学が江戸近代の合理主義思想の形成に寄与した点は、見逃すことができない。

日本における西欧近世の科学の吸収は、すでに戦国末期から安土桃山時代の南蛮時代に始まり、その後、江戸時代を通して一貫して継続した。幕末から維新にかけては、欧米の科

学技術の急速な移入が行なわれ、明治の近代化を可能にしたが、その基礎には、南蛮時代から江戸時代を通じて培われた西欧近世の学術の理解の努力があった。とすれば、日本文明の西欧化は、幕末維新から始まったのではなく、南蛮時代に始まり、江戸時代を通して進展していたとみななければならない。

その意味では、江戸時代の鎖国はなかったのだと言わねばならない。1633年から39年にかけて相次いで出された幕府の外交政策は、キリシタンの禁止、日本人の海外渡航の禁止と海外在住の日本人の帰国の禁止、貿易の長崎・平戸二港のみへの制限、ポルトガル人の追放から成っている。つまり、鎖国令は、宗教の制限と、厳しい出入国管理と、貿易の国家統制の三点から構成されている。鎖国令は、人、物、金、情報を幕府の管理下に置くという政策にすぎず、当時の日本は、決して国を閉ざしてしまっただけではない。実際、貿易は、鎖国後も、オランダ、中国、朝鮮との間で盛んに行なわれている。しかも、その貿易額は、むしろ、それ以前よりも急増したのである。

特に、平戸の商館から長崎の出島に移されたオランダ人は、世界中の物産の日本への輸出を一手に引き受けて、大きな利益を上げた。日本は、その輸入品の代価を、国内産の金銀銅でもってした。オランダはそれを独占、その財力を背景に、東アジア海域貿易で活躍したのである。それどころか、日本から流出した莫大な量の銀や銅は、ヨーロッパ市場に大きな影響を与えた。日本の近世社会は、決して、自成的に形成されてきたのではない。

江戸時代の日本文明の成熟に、オランダ経由でもたらされた西洋近世の知識、情報の果たした役割は大きい。知識や情報が入ってくるだけでも、文明は大きく変貌していくが、江戸時代の近代化にも、外来文化の積極的受容は必要不可欠であった。幕末から維新にかけての政治制度、社会制度、産業構造、全般にわたる急激な西洋近代化の動きに、日本が適切に対処しえた背景には、江戸時代までに培われた近代化の努力があった。江戸時代から明治時代への変貌は、江戸時代までにすでに醸成されていた近代の構造を再編成するだけでよかったのである。その意味では、江戸時代と明治時代は、

むしろ連続している。

しかし、この連続的發展は、決して自成的に起きてきたものではない。鎖国によって外との関係を絶った温室の中で、自然と形成されてきた動きなのではない。江戸時代の近代化の背景には、当時の西欧近世の科学知識や文物の受容の努力があった。むしろ、戦国時代から江戸時代を通じて、一貫して西欧化をしていたからこそ、明治の西洋近代化が容易だったのである。明治近代化が欧米の影響を多分に受けて成り立ったように、江戸時代の近代化も、西欧近世の影響を多分に受けて成立している。江戸時代はすでに西欧化していた。日本の西欧化は、幕末維新から始まったのではなく、戦国時代から始まり、江戸時代の鎖国下においても継続していたのである。

15、16世紀の戦国時代末期から、日本文明はすでに西欧化の流れの中にあつたのである。15、16世紀の西欧近世との出会いは、日本文明の大きな分水嶺をなしている。その後の日本文明の動きも、近世の西欧諸国の動きと連動している。現に、戦国末期から安土桃山、江戸初期から鎖国に至る日本

文明史は、スペイン・ポルトガルからオランダ・イギリスへの西欧世界のヘゲモニーの変遷を、素直に映している。だからこそ、鎖国以後の江戸時代も、オランダやイギリスがつくった世界経済のグローバル・ネットワークの影響を多分に受けているのである。西欧近世と日本近世が平行しているのは、そのためである。両者の平行関係は、両者の関係が全くない状態で、たまたま類似した動きをしていたというのではない。日本文明は、鎖国下においても、西洋近世の影響を多分に受け、その中で自己形成していたのである。

さらに、江戸時代の日本は、西欧諸国から情報や知識を受容していただけでなく、逆に、多くの文物を西欧諸国にもたらし、西欧近世の文化に深い影響を与えている。日本の情報も、オランダ商館長ティチングやオランダ医師シーボルトなどによって、ヨーロッパに伝えられていた。文明の接触や出会いには、相互作用が伴う。

とすれば、長崎にやって来たオランダ船によって、日本産の文物が海外へ運ばれた点も見逃すことはできない。例えば、17世紀中頃以後、オランダ商人は、日本の陶磁器を大量に

ヨーロッパに運んだ。そのため、ヨーロッパではジャポニズムが流行、宮殿や貴族の館を日本の陶磁器で飾るのが流行った。日本陶磁器の模倣も行なわれ、オランダやイギリスでは、日本の陶磁器に倣って、ヨーロッパ産のものが作られた。日本の陶磁器は、17世紀中頃以後、東南アジア各地、エジプトのフスタート、アフリカ南端の喜望峰などにも出土している。17世紀から19世紀にかけても、東シナ海、南シナ海、インド洋、大西洋、地中海を結ぶ交易路は、陶磁の道として繁栄していたのである。浮世絵がヨーロッパの印象派に深い影響を与えたのは、あまりにも有名である。江戸時代の日本は、盛んに発信していたことになる。日本文明が西欧文明を変貌させていた面も考えれば、この点でも、鎖国はなかったのだと言わねばならない。

日本文明は、古来、海からもたらされた文物や情報によって、常に大きく変貌してきた。大西洋、インド洋、南シナ海、そして東シナ海を経てもたらされた西欧近世の文化が、日本近世の形成に与えた影響は計り知れない。文明は、外から様々な文物や情報が流入してくることによって、自己自身を

形成していくものなのである。

交流によって、文明変動は起きる。この場合、特に、南インド文明や東南アジア文明は、ユーラシア東部の中国文明や日本文明と、ユーラシア西部の西アジア文明や西欧文明を結びつける媒体文明の役割を果たした。南アジアや東南アジアが、ユーラシアの東と西の文物を、海の交通路を通して仲介したことにより、西アジアの諸文明も西欧文明も変動し、中国文明も日本文明も変貌してきたのである。

日本文明史の中で、戦国時代から江戸時代にかけて、スペインやポルトガル、オランダやイギリスが、大西洋や太平洋やインド洋、南シナ海や東シナ海を経てもたらした新しい文物は、日本文明史の中で、近世という時代をつくることに大きく貢献してきたのである。

太平洋ネットワークと日本文明

近世の太平洋ネットワークで活躍したのは、スペイン人であった。スペインは、新大陸を征服した後、さらに太平洋に出る道を模索し、西回りで、大西洋から香料諸島に至

る道を開発した。香料諸島を巡っては、東回りで到着していたポルトガルと醜い争いを続けたが、その結果、スペインは、フィリピンのマニラを基地として、アジア経営に乗り出す。そして、黒潮と北太平洋海流を利用した大圏航路を<発見>、マニラとメキシコのアカプルコを結ぶ定期航路をつくり、中国や日本との交易に従事した。

スペイン人やポルトガル人による地球規模の商業活動を物語るものとして、この時代のグローバルな銀の流通は注目しておかねばならない。スペイン領の新大陸で奴隷労働によって開発された銀山からは、大量の銀が搬出され、それが、ヨーロッパやアジアに運ばれた。その量はあまりにも大量だったため、ヨーロッパでは、インフレが起きたほどであった。このヨーロッパにもたらされた銀は、香料などの買い付けに使われ、インドや東南アジアに流入してきた。他方、太平洋の西端の日本列島でも、16世紀前半から17世紀前半にかけて銀山の開発が行なわれ、大量の銀が輸出された。日本産の銀の輸出も大量であったため、結果として、それは、ヨーロッパ市場の大きな変動要因にもなっ

た。

スペインとポルトガルの大航海がもたらした第一の成果は、海の道を通したグローバル・ネットワークが形成されたことであろう。特に、スペインが開発した大西洋から太平洋に至る航路は、アメリカ大陸を世界史の舞台に登場させる役割を果たし、ユーラシア大陸と南北アメリカ大陸を一つの通商圏として統合した。それに、インド洋からアジアに向かったポルトガルの活動が加わり、ヨーロッパ人の商業活動圏は、地球的なネットワークを形成したのである。スペインやポルトガルによって形成されたグローバル・ネットワークは、ユーラシアに築かれたイスラムやモンゴルによるグローバル・ネットワークの拡大形態だったと言えよう。しかも、その特徴は、海洋支配によるグローバル・ネットワークの形成だったということである。スペインやポルトガルが持ち込んだ海の支配という考えは、その後のオランダやイギリスにも引き継がれ、海洋文明としての西欧近代文明の出発点をつくった。

この海洋中心のグローバル・ネットワークが形成された

ことによって、地球上の各地域は、それまで以上に相互に連動し、新大陸やアジア諸国にも、海上貿易を主軸にした商業が発達した。さらに、この商業活動を通して、新しい技術や世界観も伝わり、世界的視圏における近世が成立した。新大陸や日本産の銀、東南アジアやインドの香料の価格が、ヨーロッパ市場に直接影響を与え、西欧諸国の抗争がすぐに全世界に拡大されることになったのが、近世という時代であった。

西欧中心の近世のグローバル・ネットワークを最初につくりだしたのは、大西洋から太平洋を制したスペイン勢力と、大西洋からインド洋を制したポルトガル勢力の東西二勢力であった。このうち、太平洋からやってきたスペイン勢力と近世日本との関係は、インド洋からやってきたポルトガル勢力との関係ほど濃厚であったわけではない。しかし、それでも、日本は、マニラのスペイン政庁やメキシコのスペイン政庁と交渉をもった。江戸時代、鎖国下でも、オランダや琉球との貿易を通して、日本の陶磁器が輸出され、それがマニラに渡り、太平洋を越えてメキシコにまで運ばれた。18世紀

から 19 世紀にかけての日本の陶磁器がメキシコに出土するのは、そのためである。鎖国下にあっても、太平洋交流はあったのである。

鎖国下の太平洋交流として無視できないのが、漂流民とその送還の問題である。日本の漁民や商人が、太平洋を漂流して、アメリカ西海岸やハワイに上陸した 19 世紀の多数の記録が残されている。なかでも、アメリカ船に救われたような場合には、一般に、船員のうちで最も若い少年が可愛がられ、渡米、教育や洗礼を受け、その後帰国、開国日本のために大きな働きをした。ジョン万次郎やジョセフ彦蔵などである。当時、北太平洋はマッコウクジラの大漁場で、アメリカやイギリスの捕鯨船が活躍していた。しかし、これらの捕鯨船は、生鮮食料品の欠乏、船の破損、遭難のために、しばしば日本沿岸に接近、日本の鎖国政策と対立していた。アメリカが、日本の漂流民を助け、その送還を理由に、江戸幕府に開国を迫ってきたのは、捕鯨の必要からであった。その意味では、太平洋のマッコウクジラと漂流民が、日本を開国に導いたことになる。ユーラシア大陸の西端の大西洋岸に発生した近代

文明の圧力は、新大陸さらに太平洋に及び、アメリカの開国要求となって日本に及び、日本の近代化が始まったことになる。

文明とは何か

文明は他の文明との交流によって自己自身を形成する。文明があって交流があるのではなく、交流があって文明が形成されるのである。だから、文明は、互いにつながり、ネットワークを形成している。この文明間ネットワークを通して、各文明は様々の文物を受け渡していく。ネットワークとは、多くの点が互いに多くの線で連結された編み目構造をいう。人類の営む文明も、多くの拠点相互に結ばれ相互に関連している多元構造を成しており、ネットワーク構造になっている。広域の地域間を結ぶ交通網は、文明のネットワーク構造の具体化である。陸にも海にも広がる網の目のような交通網を通して、人々が移動し、物が交換され、情報が伝達され、技術が伝播し、文化が移転することによって、文明は互いに発展する。人間の交易活動、外交や宗教などの交流、民族移

動などが果たす役割もそこにある。

文明は、文明間に張り巡らされたネットワーク全体の中で理解されねばならない。その意味では、文明は関係性においてあるものである。文明を成り立たせているものは、個々の文明ではなく、文明間の関係なのである。文明のネットワーク構造においては、諸文明は相互に浸透し合っているから、それぞれの文明が、他のすべての文明を含む。それぞれの文明は、他のすべての文明から成り、他のすべての文明は、それぞれの文明から成る。それぞれの文明の中に、他のすべての文明が宿り、他のすべての文明の中に、それぞれの文明が宿る。

したがって、一つの文明は、文明間ネットワークの結節点に生成するものと考えねばならない。日本文明もまた、草原の道やオアシス路、南海路や太平洋など、陸や海に巡らされた文明ネットワークの結節点に生じた文明である。現に、日本文明も、ユーラシア大陸、東アジア海域、インド洋、地中海、太平洋や大西洋など、陸や海の諸ルートとつながり、それらを通して、世界中の文明を受け入れている。

る。日本文明の中に、世界文明が宿っているのである。

文明と文明がネットワークを形成し、相互に関連しているところでは、どの文明の中にも他の文明の要素が入り込み、文明は互いに入り組み、浸透し合う。文明は、もともと、外部から種々の要素が入り込んできて、それらが組み合わせられることによって、新しく形成されていく。各文明の独自の様式も、他の文明要素の組み換え直しによって出来上がっている。それぞれの文明は、孤立して存在するのではなく、相互に関連している。文明と文明は互いに入り込み、影響を及ぼし合っている。一つの文明が文明として成り立つのも、他の文明がその文明の中に入り込むことによってである。

だから、どこの文明も、雑種化によって独特の文明をつくりあげていると言える。雑種でない文明などない。独立自存の純粹文明などというものはない。どの文明も、他から学び、他から借りてきて、独自の文明に達するのである。日本文明も、常に他から学び他から借りてきて独自の文明を形成してきたのである。その意味では、日本文明は、外

来文明の集積だとも言える。

特に、日本列島は、ユーラシア大陸の東端に位置し、北太平洋の西端に位置する島嶼である。島に育つ文明は、大陸に育つ中心文明から見れば、辺境文明、あるいは、せいぜい周辺文明としか見られない。しかし、島は、決して辺境でもなければ、周辺でもない。島には、海上交易網の結節点として、港があり、常に新しい文化が流入していた。島は、自立性と独自性をもつが、決して閉ざされてはいない。それどころか、海上交通によって、他の世界と縦横に結びついていた。それゆえ、島という小さな拠点には、外の大きな世界が集約されている。島は、港市同様、新文明の流入拠点であり、そこから、また、新文明が流出する拠点でもあった。島は、新しいものを受け入れ、新しいものを受け渡す文明の超伝導地帯である。日本文明も、このような超伝導地帯としての島に育った文明であり、外来文化を無尽蔵に吸収し受信するとともに、それらをアマルガムにして、新しい型の文化をつくり、また、世界中に発信し他の文明に影響を与えてきた。21世紀も、なお、日本文明

は発信し続けるであろう。

参考文献

小林道憲『文明の交流史観』ミネルヴァ書房 2006年

宮崎正勝『文明ネットワークの世界史』原書房 2003
年

伊東俊太郎『比較文明と日本』著作集第8巻 麗澤大学出
版会 2008年